読売 俳壇

矢島 渚男 選

フライパン同じに傾ぐ涼しさよ　周南市　木船　君枝

【評】ホテルの大きな厨房だろう。休憩中でひっそりして壁にたくさんの磨かれたフライパンが整然と吊るされて仕事を待っているように涼し気に見える。

旱梅雨野菜工場レタス生み　大和市　岡崎　毬子

【評】日照り続きで野菜が高いが野菜工場はフル稼働で生産を続けている。ゆくゆくは米だって作れるだろう。

夢に覚め又別の夢熱帯夜　岡山市　宮下　哲朗

【評】熱帯夜という言葉はいつからだろう。ある辞書の例文で50年ほど前の小説に書かれていた。二十五度を下らない寝苦しさが定義だった。

星だけは見ものとあるよ避暑の宿　宝塚市　広田　祝世

親鳥の今日は声無く鳧巣立つ　浜松市　木通　佳子

炎天や人は無口で影を連れ　神奈川県　中村　昌男

蘇る父の被爆や原爆忌　神戸市　大浜　義弘

知らぬ子も集えば仲間水遊び　枚方市　佐藤　紘子

ベルトコンベアーめく大雪渓をゆく　羽村市　田中　哲也

買って出る流し索麺流し役　佐野市　村野　則高

高野ムツオ 選

だぶだぶの皮躓らせて蟇の恋　神戸市　山口　誠

【評】争いの果て、やっと雌の背中に抱きつくことができた。しかもなお他の雄に奪われまいと必死に雌にしがみつく。そんな蟇の一途な恋がおかしみを伴って実に鮮やか。

耕して母が生きたる地ぞ蚯蚓　東京都　佐藤　勝美

【評】畑仕事に終生を費やした母。その畑の蚯蚓もまた土の有機物を食べながら生きていた。強調の助詞「ぞ」に母への思慕がこもる。

誘蛾灯に開く教科書無人駅　小山市　松本　喜雄

【評】昭和三十年代、東北など過疎地には無人駅がすでにあった。駅かたわらの誘蛾灯の光で勉学にいそしむ姿が確かに見受けられた。

島ぢゆうがみんなでてくる浜涼み　三郷市　山田　吾男

炎花ふるさとの道細きまま　富士宮市　渡辺　春生

砂漠化の広がる星よ雲の峰　前橋市　西村　晃

たそがれの塚本邦雄のダリアかな　小田原市　北見　鳩彦

子の水筒かちやかちやかちやと雲の峰　日立市　菊池　風峰

えごの花学生寮の窓全開　川口市　清正　風葉

曾て村ありしダム湖や雲の嶺　和歌山市　針谷　国光

正木ゆう子 選

初めての呼び名を三度蛍狩　京都市　松尾　昌典

【評】苗字ではなく名前で呼んだ、それともニックネーム？　解釈が色々出来て気になる句。人間関係は名前を呼びかけることから始まる。関係が変われば、呼び方も変わるのだ。

少年の夢のはじまり含羞草　松阪市　奥　俊

【評】自然が見せてくれる不思議に出会う体験は、少年少女の夢の入口。含羞草に触れる指先と、見開かれた瞳。彼は植物学者になれるかも。

冬眠し仮死化せよ炎天地獄　水戸市　加藤木よういち

【評】冬眠ならぬ夏眠でもしたいわね、という会話はわが家でもあった。そうでもして遣り過ごさねば、乗り越えられない程の猛暑真っ最中。

蠖蠖の分団歪直しつつ　神奈川県　石原美枝子

風鈴やゑくぼうかべて語る人　東大阪市　木田　博幸

冷や汁の鱧の頭をせせり食う　高槻市　平山　良志

をりし葉へ戻せば蝸牛歩み出づ　大船渡市　桃心地

日盛に眩暈のごとく夏の蝶　土浦市　古目谷和男

静けさや親の居ぬ間の燕の子　福島市　引地こうじ

この穴を出でし蟬かもひた鳴ける　越谷市　安居院半樹

小澤 實 選

大いなる片陰都庁前広場　埼玉県　小町　季生

【評】東京都庁の前に広がっている広場に、大きな片陰が落ちている。もちろん、これは都庁の巨大なビルがつくりだしたものなのである。都会の風景を鮮やかに捉えた。

夜濯や咥へたばこの父の唄　伊勢市　藤田ゆきまち

【評】父が夜に洗濯をしながら唄を歌っている。それもたばこをくわえたまま歌っているという。闇のなかに味のある歌声が響いている。

田植時クラス半分欠席す　館林市　坂口　穣

【評】稲作地帯の学校ではかつてこうだったろう。学生もまた、田植えの際のたいせつな労働力だったわけだ。半分の把握が端的である。

豚足で焼酎もらう歓喜天　松江市　三方　元

万緑や死ぬのはいつも他人なり　つくば市　小林　浦波

格安の曲がり胡瓜や直売所　宇都宮市　佐藤　順子

チェロ背負ふひとのトートにたうもろこし　藤沢市　金子真悠美

網戸越し隣家の夕餉匂ひけり　三郷市　吉村　喜子

ハンガーにかかるハンガー朝曇　小諸市　藤　雪陽

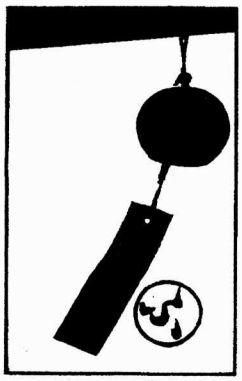
張り付きて窓の守宮の手の小さき　大和市　藤原ミツエ

俳句あれこれ　成田一子（俳人）

つぶやく水中花

＜ある日妻ぽとんと沈め水中花＞　山口青邨。我が家でもある夏の晩、ほろ酔いで帰宅した父がコップの水に何かを沈めた。それは直立して、金魚の鰭のようなひらひらを水に広げた。初めて見る「水中花」。小学生の私と幼い妹の目は、コップの花にしばし釘づけになった。花を開かせただの水道水まで、とろんと色づいたように見えた。

翌朝早くに目が覚めると、水中花にありえない程びっしりと細かな気泡が付いている。まるで夜じゅうつぶやいていたみたいに。昼間も水中花はそこにあったが、夜に見るのとは違って、夏休み真っただ中の明るい居間ではどこか浮いていた。子供らしい飽きっぽさで水中花への興味はすぐに失せた。＜泡ひとつ抱いてはなさぬ水中花　富安風生＞。あの日の気泡まみれの水中花は、夜の賑やかな街から連れ出され、知らない家でいきなり水に沈められて、ひと晩何をつぶやいていたのだろう。



題字デザイン・イラスト　福田美蘭